

認知的立場からみた全体・部分の関係について

村上 龍弘

1. はじめに

いわゆる全体・部分の関係(part/whole relation)とは、ある種の内在的関係であり、中右(1998)の言葉を借りれば、構成的(constitutive)関係であるとも表現できる。この全体・部分の関係が観察される典型例のひとつに所有構文がある、ということは周知の事実である。

また、広く知られているように、所有という概念は、譲渡可能所有(alienable possession)と譲渡不可能所有(inalienable possession)とに二分される。多くの言語において、これらの概念は形態素などにより区別、標示される。¹ところが、英語の場合、そういった弁別的な標識が存在しないため、譲渡可能所有と譲渡不可能所有との区別に関する研究は、母語話者の直観によるところが大きい。

具体的にみてみよう。譲渡不可能な所有関係は、通例、全体・部分の関係にあるといわれる。この側面に注目し、譲渡可能性、譲渡不可能性を特徴づけようとする研究がある。Vergnaud and Zubizarreta (1992)は、全体・部分の関係は意味的依存関係であるとし、ここから、統語論のレベルにおいて、(部分に相当する)譲渡不可能な概念を指す名詞は、(全体に相当する)所有者に対応するある種の潜在項(implicit argument)をとるが、譲渡可能な名詞はそれをとらない、と仮定している。一方、名詞の意味から所有関係の特徴づけを行っている Baker (1995)も、譲渡不可能所有の解釈は、所有物を表す名詞が指す全体・部分の関係により生じている、と述べている。

しかしながら、それらの研究に共通する問題は、なぜ所有物を表す語が所有者を思い起こさせるのか、すなわち、なぜ部分を表す語が全体を喚起するのか、という、いわば、前提ともいべき点について説明がなされていない、ということである。

本稿では、この問題は、我々の認知能力のひとつである参照点能力(reference-point ability)により説明されるということ、Langacker (1991, 1993)を支持する形で述べていく。ここから、全体・部分の関係に見られる内在的関係は、参照点能力に還元できるということを主張する。さらに本稿では、(1)のような、Levin (1993)のいう身体所有者昇格交替に見られる全体・部分の関係を、参照点能

¹ 詳細は Chappell and McGregor (1995)所収の諸論文を参照のこと。

力による見地からとらえることを試みる。

- (1) a. Carrie touched him on the shoulder.
b. Carrie touched his shoulder.

Levin (1993: 155)

2. 譲渡可能所有と譲渡不可能所有との区別

ここでは、譲渡可能所有、譲渡不可能所有の区別について論じている先行研究として Vergnaud and Zubizarreta (1992)、Baker (1995)を取り上げ、彼らの分析を概観しつつ、問題点を指摘していく。

2.1. Vergnaud and Zubizarreta (1992)

譲渡不可能所有という概念は、全体との関連で部分が内在的に定義される (inherently defined) 点で、意味的に依存している関係である、と Vergnaud and Zubizarreta (1992)は述べている。例えば、人間の身体部分を表す名詞は、鼻、両目、口、胃、両手、両腕、等から構成される典型的な「ヒト」、という概念との関連で定義されるという。この依存関係は統語論において、(2)にある仮説に基づき反映される。

- (2) An inalienable noun, but not an alienable one, takes a possessor argument.

Vergnaud and Zubizarreta (1992: 596)

(2)の大ざっぱな意味は、「譲渡不可能な概念を指す名詞が、所有者を表す項をとる一方で、譲渡可能な概念を指す名詞は、それをとらない」となる。これに従えば、身体部分を表す名詞は次のような語彙的表示をもつことになる(フランス語の“gorge”は英語の“throat”の意味である)。(3a)は譲渡不可能な解釈の場合、(3b)は譲渡可能な解釈の場合である。²

- (3) a. gorge(x)
b. gorge

Vergnaud and Zubizarreta (1992: 597)

² この2つの語彙項目は、語彙余剰規則(lexical redundancy rule)により文法的に関係づけられ

Vergnaud and Zubizarreta (1992)はまた、身体部分を表す名詞だけではなく、文脈によっては譲渡不可能所有を表す名詞も同様に、所有者を表す項(possessor argument)をとる、と主張している。その例として彼らがあげているのは、衣服(clothes)を表す名詞、親族語(kinship terms)、絵画名詞(picture noun)、そして computer、car などである。

(2)の仮説のもと、譲渡不可能所有に対する母語話者の直観を、文法構造に反映させてその説明を行っている Vergnaud and Zubizarreta (1992)は、部分的にしか譲渡不可能所有の特徴を述べていない、といわざるを得ない。身体部分を表す語が「ヒト」という概念との関連で定義される、という彼らの仮説は、なぜ、身体部分が所有者を思い起こさせるのか、ということの説明していないからである。

2.2. Baker (1995)

譲渡可能所有と譲渡不可能所有との区別に関する Baker (1995)の主張は、(4)に集約される。

- (4) The denotation of possessive descriptions crucially depends on the argument structure of the possessee nominal, giving rise to lexical and extrinsic interpretations.

Baker (1995: 18)

(4)の趣旨は、「所有表現が述べるものは、所有物を表す名詞の項構造(argument structure)に必然的に依存している。これにより、語彙的解釈と外因的解釈が生じる」、ということである。譲渡可能所有は、ここでいう外因的解釈(extrinsic interpretation)をもつ所有に含まれ、譲渡不可能所有は、語彙的解釈(lexical interpretation)をもつ所有に含まれる。それぞれの例は、(5)、(6)に示すとおりである。

(5) LEXICAL POSSESSIVES

- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| a. John's purchase | Derived nominals |
| b. John's child | Kinship terms |
| c. John's nose | Body part terms |
| d. the table's top | Generalized part/whole relation |
| e. the woman's pen pal | Arbitrary relational nouns |

(6) EXTRINSIC POSSESSIVES

- a. John's cat
- b. John's yogurt
- c. John's firetruck

Baker (1995: 8)

Baker (1995)によると、譲渡不可能な名詞類である親族語や身体部分語は、2つのものの間の関係(a relation)を述べるという。例えば“child”という語は、両親と子どもとの間に成立する、2項的關係を表す。この名詞類が、所有格句(NP₁'s NP₂という構造)に現れるとき、それらが述べる関係こそが所有格句全体の表す意味になる、と彼は主張している。Baker (1995)は、このような所有関係が名詞の語彙の意味から直接生じていることに注目し、これを語彙的所有(lexical possession)と呼ぶ。反対に、所有されているものを表す名詞類が個体の集合(a set of individuals)を述べる場合、2つのものの間の関係は、文脈によって決定される何らかの關係に依存し、その解釈が決まる。この所有關係は、外因的所有(extrinsic possession)と呼ばれる。

Baker (1995)の分析で問題となるのは、なぜ語彙的所有に現れる、關係を表す名詞類の意味が、その語が含意する内在的性質との關係により決定されるのか、という点を説明していないことである。例えば、身体部分語の場合は、その所有者と身体部分との間に成立する2項的關係を表すことになるだろう。しかし彼の分析では、なぜ部分が全体を喚起するのか、という点を、上で述べた Vergnaud and Zubizarreta (1992)と同様に明らかにしていない。

次節では、以上指摘してきた問題点が、我々の認知能力の1つである参照点能力(reference-point ability)による説明で解決できることを、Langacker (1991, 1993)を支持する形で主張していくことにする。

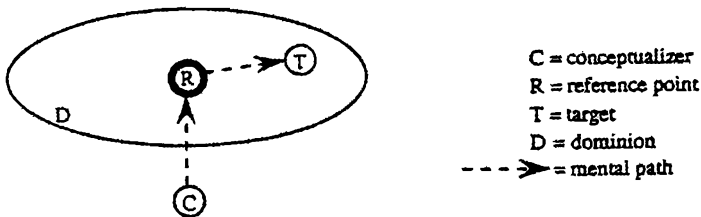
3. 参照点能力

数々の先行研究で観察されてきているとおり、所有構文によって言語化される概念はさまざまある。この事実から、Langacker (1991)は、すべての所有構文の意味が、プロトタイプの意味から拡張したものであると分析することは疑わしい、と主張している。そこで Langacker (1991, 1993)が所有構文を説明するために提案しているのが、我々の認知能力のひとつと考えられる、参照点能力(reference-point ability)である。

参照点能力とは、ある目立たないものに注意を向ける際、その周囲にある、よ

り認知的に際立ちの高いものを参照し、それを經由して目的のものとの心的コンタクトを形成することを可能にする認知能力である。例えば、北極星の位置を特定するとき、我々はまず、その近くにあつてより目立つ、北斗七星に注意を向ける。そして、北斗七星の端を手がかりに視線をずらしていくことで、北極星の位置を把握することができる(Langacker (1993: 5))。この場合、北極星が心的コンタクトを結ぶ対象で、北斗七星が参照されるものとして機能している。(7)にまとめられるこの一連のプロセスは、参照点構造(reference-point construction)と呼ばれる(河上(編著) (1996)参照)。

(7)



Langacker (1993: 5)

Cは概念化者(conceptualizer)、すなわち話者や聴者を表している。Rは参照点(reference point)、Tはターゲット、そして楕円形の領域Dは支配域(dominion)をそれぞれ表す。支配域とは、ターゲットとなりうるものの集合と考えてよい(Langacker (1991: 177))。また、点線の矢印は、メンタルコンタクトが形成される際の心的経路を表している。メンタルコンタクトとは、概念化者があるものに注意を向けることをいう。

ここで注意したいのは、参照点が太線で表されていることである。これは、参照点が何らかの認知的際立ちを持っていることを示している。その際立ちは、参照点自身が内在的に持っているもの、あるいは、文脈によって決定される性質のものである(Langacker (1993: 6))。

4. 全体・部分の関係の見直し

ここで、Langacker(1991, 1993)が提唱している参照点能力に基づいた、所有構文の分析の優位性をまとめておきたい。上で指摘した、Vergnaud and Zubizarreta (1992)および Baker (1995)に共通する問題点は、なぜ身体部分が全体を想起するの

か、ということが未解決である点であった。これは本稿の立場からみれば自然に説明できる。所有構文に見られる所有者と所有物、言いかえるならば、全体と部分の関係は、参照点構造に還元できるのである。

Langacker (1993)によると、部分を指す語はベース(base)として、全体という概念を思い起こさせる。そしてこの概念との関連で、部分を表す語は、その語が表すものをプロファイル(profile)するという。³ 例えば、現実世界において、*elbows, tails, roofs* といった部分が世界を占めているということはありません、*people, animals, houses* 等によって占められていると我々は認識する。そして、これら全体を参照することによってのみ、我々は下位部分を特定できる(Langacker (1993: 9))。よって、所有構文において経験的に観察される、所有者・所有物という線形順序は、(8)にまとめられる、普遍的な認知的原則から予測可能である(Langacker (1991: 171))。

- (8) Other things being equal, various principles of relative salience generally hold:
human > non-human; whole > part; concrete > abstract; visible > non-visible; etc.

Langacker (1993: 30)

この原則により、所有者と所有物との間にある非対称性が説明される。この点に関する彼の考えは、(9)によく現れている。

- (9) A whole is thus the possessor of its parts, rather than conversely, because its reater prominence makes it the obvious choice as reference point (*the girl's neck* vs. **the neck's girl*).

Langacker (1991: 171)

以上の議論から、先行研究において未解決であった、部分が全体を思い起こさせる、部分が全体との関連で把握される、という問題は、参照点構造に基づいて自然に説明できるということが分かる。

³ 紙幅の都合上簡潔に説明せざるを得ないが、プロファイル(profile)とは、認知的に際立つ前景(figure)に相当し、ベース(base)とは、その背後に広がる背景(ground)に相当する。詳細は、Langacker (1990)、河上(編著) (1996)等を参照のこと。

5. 身体所有者昇格交替に見られる全体・部分の関係

前節において、内在的関係とみなされる全体・部分の関係は、Langacker(1991, 1993)が提唱する参照点能力の見地から、自然に説明できるということを主張した。これをふまえて本節では、1節で紹介した Levin(1993)のいう身体所有者昇格交替 (body-part possessor ascension alternation, 以降 BPAA と略記)に見られる、全体・部分の関係について考察していく。便宜上、これより先では、(10a)型の文を A 型、(10b)型の文を B 型と呼ぶ。

- (10) a. Carrie touched him on the shoulder.
b. Carrie touched his shoulder.

Levin (1993: 155) (= (1))

以下、A 型、B 型の構文は場面に応じて使い分けられているということを示す、実際のデータをみる。ここから、本節では A 型、B 型の構文は把握(construal)の仕方が異なり、それは参照点能力により動機づけられているということを最初に主張する。続いて、この交替、特に A 型の構文、の統語的特徴を概観した後、これと参照点構造とを反映させた、それぞれの構文に対応する意味構造を提案する。

5.1. BPAA における意味の違いと参照点能力

先行研究においてしばしば指摘されてきているように(後藤(1978)、小西(1976)等)、A 型は被行為者そのものに重点を置いた言い方であるのに対し、B 型は被行為者の身体の一部に重点を置いた言い方である(小西(1976: 287))。よって、A 型は主観的で、親愛の情などを含む表現に適し、B 型は客観的で被行為者に対する感情を交えない場合の表現に適していると小西(1976)は報告している。後藤(1978)が提示している(11)は、この違いを明白に表している。

- (12) Quietly he tracked her, and his brain was red with anger. She burst clear of the brush line and stumbled over the little boulders toward the water, and then she heard him coming and she broke into a run. Her arm was up to throw when he leaped at her and *caught her arm* and wrenched the pearl from her. *He struck her in the face* with his clenched fist and she fell among the boulders, and *he kicked her in the side*. In the pale light he could see the little waves break over her, and her skirt floated about and clung to her legs as the water receded.

Kino looked down at her and his teeth were bared. He hissed at her like a snake,

and Juana stared at him with wide unfrightened eyes, like a sheep before the butcher. (J.Steinbeck: *The Pearl*, p.76)

後藤(1978: 353)

貧乏漁師の Kino はたまたま見つけた真珠を売って大金を得ようとするが、そのことによって災いが生じ、不幸になることを恐れた妻の Juana が夜中にこっそりとその真珠を海へ投げ捨てようとする。目覚めた Kino がこれに気づき、追いかけて真珠を取り戻す場面である(後藤(1978: 353))。まさに真珠を投げ捨てようとして振り上げられた Juana の手に Kino が飛びつく場面であるが、この場合 Kino の関心は Juana ではなく、真珠をにぎって振り上げられたその手に集中されているため、A 型の表現を用いることは不適切である、と後藤(1978)は述べている。また、真珠をむしり取った Kino が激しい憎悪の念を持って Juana の顔面をこぶしで殴りつけ、倒れた Juana の横腹を蹴り上げる場面において、Kino の憎しみの対象は、Juana の顔面、あるいは横腹ではなく、大切な真珠を捨てようとする Juana 自身である。したがって、B 型の表現を用いるのは不適切であるし、“his teeth were bared”、“he hissed at her like a snake”という部分に現れている感情は、A 型でなければ伝わってこない、と後藤(1978)はまとめている。

この事実を本稿の立場から説明すれば、所有者が認知的際立ちを持つ場合には A 型、身体部分に認知的際立ちがある場合は B 型が用いられる、ということができる。つまり、プロファイルされるものが A 型と B 型では異なるといえる。

ここで注意しなければならないのは、A 型、B 型の両構文の表す意味が真理条件(truth condition)的にほぼ同義であるといわれる場合がある、ということである。この事実も同じ流れで説明できる。すなわち、A 型、B 型ではプロファイルされる部分がそれぞれ異なるものの、両構文とも参照点として所有者を選択するために、その同義性が生じるのである。

以上、BPAA における意味の違いが、参照点能力に還元されうるということ、事例に基づき主張した。続いて、この交替の統語的特徴をみていく。

5.2. BPAA の統語的特徴

(13)にあげた、BPAA の例をみよう。

- (13) a. Paula spanked the naughty child on the back.
b. Paula spanked the naughty child's back.

Levin (1993: 152)

B 型の場合、動詞の目的語、(13b)では“the naughty child’s back”、は項として存在しているということに異論はないと思われる。問題になるのは A 型における、目的語、前置詞句の項関係である。本稿では、福地(1995)が主張している統語構造の分析が妥当であるという見通しがあるので、彼の分析を採用し論を進める。

福地(1995)によれば、(14a)において(by) the arm の部分が pull に関して 1 つの完全な意味役割を持つと、それは項となるという。しかし、(14b)を Guéron (1985) から引用しつつ、(by) the arm の部分を統語的に動かすことはできないと説明している。

- (14) a. I pulled him by the arm.
b. *By the arm, I pulled him.

福地(1995: 96)

そして(15)の例にみられる by 句と対比させ、(14)の by 句はこれのように完全な意味役割を持ちにくいと述べている。

- (15) a. She met him by the fountain.
b. By the fountain, she met him.

(ibid.)

さらに Postal (1994)から(16)の例を引用し、この種の前置詞に言語的操作をくわえにくいとことを指摘している。

- (16) a. *They shouldn’t have touched him on the thumb, but they did touch him on it.
(代名詞化)
b. *The thumb is easy to touch him on. (tough 移動)
c. *The thumb, I never touched him on. (話題化)
d. *The doctor should never have (*Bill on) yesterday – the arm which he broke while skiing. (重名詞句移動)

福地(1995: 97)

以上から、この構文の前置詞に続く名詞句は動詞の目的語と一体になって初めて一人前の項になる、と福地(1995)は結論づけている。

以上本節では、BPAA、特に A 型の文の統語的特徴をみた。続いて、前節および本節での議論をもとに、BPAA の意味構造を検討していこう。

5.3. BPAA の意味構造の提案

5.1節、および5.2節の議論において、BPAAは参照点能力により動機づけられているということを主張し、そしてA型構文は、動詞の目的語と前置詞句が一体となって項を形成していることを確認した。この議論をもとに、本節ではA型、B型、両構文の意味構造を新たに提案したい。

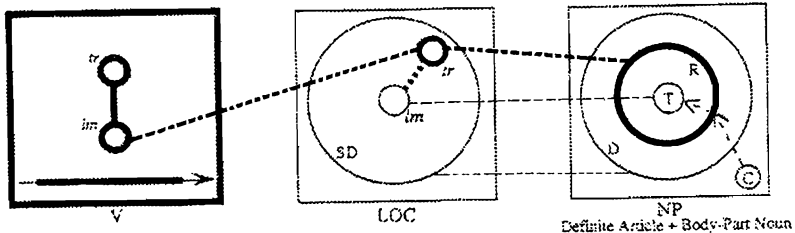
次の例をみよう。

- (17) a. He touched me on the forehead.
b. He touched my forehead.

後藤(1978: 349)

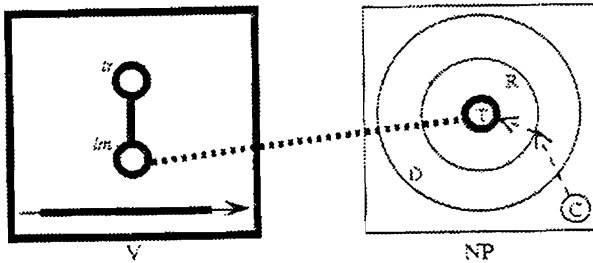
すでに上で述べたとおり、A型とB型の構文に共通しているのは、概念化者が所有者を参照点として、その身体部分とメンタルコンタクトを形成する、ということである。両構文で異なるのは、身体部分とその所有者、どちらをプロファイルするか、ということであった。すなわち、A型構文の場合は、参照点となる所有者がプロファイルされ、B型構文の場合は、その身体部分がプロファイルされる。(17)の例でいうと、A型構文に対応する(17a)でプロファイルされるのは *me* であり、B型構文に対応する(17b)でプロファイルされるのは *forehead* である。したがって、A型、B型構文それぞれのスキーマは(18a)、(18b)のようになるといえる。⁴

- (18) a.



⁴ 厳密には、本交替に特有である、接触動詞の特徴もこれらのスキーマに組み込む必要がある(Murakami (1999)での議論を参照)。本稿では、全体・部分の関係に論考の焦点を置いているので、この問題については稿を改め論じることとした。

b.



まず、A型に対応する(18a)をみよう。A型構文の動詞の補部は、動詞の直接目的語と前置詞句が一体となって項を形成している。そして、その項を構成しているのは身体部分とその所有者であり、動作が及ぶ対象は、広い意味での場所と考えられる。この対象は(18a)において、左から2番目の正方形で示されるLOCに対応する。LOCの内部、SDで表される領域は探索領域(search domain)のことである。探索領域とは、所格(locative)においてトラジェクターが生起できる領域のことをいう。LOCのトラジェクター(*tr*)は、所有者である動詞の直接目的語に対応する。A型構文における動詞の目的語は、参照点として機能し、かつ認知的際立ちを持つ。それを表しているのが、右端の正方形の内部、支配域Dの中にある太い線で表されている円R(参照点)であり、これとLOCのトラジェクターは、対応する。この対応は、両者を結ぶ点線によって表される。また、LOCのランドマーク(*lm*)は、身体部分である前置詞の目的語に相当する。これは、右端の正方形の内部、支配域Dの中にある円T(ターゲット)であり、これら2つも対応を表す点線で結ばれている。

続いて、B型のスキーマである、(18b)をみよう。動詞の目的語は左の正方形の中にある、ランドマークに相当する。B型は所有者を参照点とするものの、その身体部分に認知的際立ちがある。これを表しているのが、右の正方形、支配域Dの内部にある太線で表された円Tである。2者間を結ぶ点線は、その対応を表している。

以上本節では、BPAAのA型、B型それぞれの構文に対応する意味構造を提案した。

6. 結語

本稿では、全体・部分の関係は Langacker (1991, 1993)の提唱する参照点構造により動機づけられているということを主張した。また、全体・部分の関係が観察される身体所有者昇格交替について、参照点構造、および統語的、意味的特徴をふまえ、対応するスキーマを新たに提案した。

参考文献

- Baker, Chris. 1995. *Possessive descriptions*. Stanford, Calif.: CSLI Publications.
- Chappell, Hilary and William McGregor, ed. 1995. *The grammar of inalienability: A typological perspective on body part terms and the part-whole relation*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, image and symbol: The cognitive basis of grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- _____. 1991. *Foundations of cognitive grammar, vol. 2: Descriptive application*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- _____. 1993. Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1-38.
- Levin, Beth. 1993. *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Murakami, Tatsuhiro. 1999. Contact verb constructions in English: A cognitive grammatical approach. In *Bulletin of English Education Iwate University* 1: 59-70.
- Vergnaud, Jean-Roger and Maria Luisa Zubizarreta. 1992. The definite determiner and the inalienable constructions in French and in English. *Linguistic Inquiry* 23: 595-652.
- 福地 肇. 1995. 『英語らしい表現と英文法 — 意味のゆがみをともなう統語構造』東京：研究社出版。
- 後藤 弘. 1978. 「英語の接触動詞に関する一考察」『酪農学園大学紀要』第7巻 第2号：349-372.
- 河上 誓作 編著. 1996. 『認知言語学の基礎』東京：研究社出版。
- 小西 友七. 1976. 『英語シノニムの語法』東京：研究社出版。
- 中右 実. 1998. 「空間と存在の構図」中右 実, 西村 義樹 著. 『構文と事象構造』東京：研究社出版。